

タイトル：「オノマトペにみるタイ語の音象徴」

本文

私達は、ある一定の区切られた範囲の概念に、言語による名称＝記号を与え、その記号と概念とを結ぶ経路を記憶・蓄積させておき必要に応じて複雑に組み合わせながらコミュニケーションを行う。しかし、語を構成する音声というものの自体が、象徴的な意味、つまり一般に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を表すことがある。（田守，2002，p.134）音声形式自体が、言語による名称＝記号の持つ意味とは別に、認知主体である人間に対して、〈外に広がる解放の音〉〈乾燥しているもの〉〈太く丸いもの〉〈スピード感〉など物音・声・状態・性質・感覚の様々な可能性を思い描かせることがあるということであり、それを音象徴 **sound symbolism** と呼んでいる。

また、私たちが言語音として聞き取る音は、感覚受容器等、身体性を基盤にして「言語」音として主体的に聞き取る音のことで、音響学的な物理音を客体、身体を通して人間が聞き取る営為を主体とすると、言語音とは主体と客体との相互作用によって生み出される特別な音のことである（吉村，2002，p.123）。多くの言語で音声に対する感覚が共通している点もある一方、背景にある母語の持つ音の特徴、文化的記憶や感覚によってもその音に対して聴く側の主観がプラスされ、あるいは異なった概念を抱かせるものにもなり得る。つまり言語音の中の様々な音声記号と概念の対応パターンは、共通点もある一方、母語によってある程特徴があることが考えられる。

本稿では、対象の音やイメージと直接のつながりを持つ（調音 **articulation** が指示物のイメージと近く、類像的 **iconic** であり耳にするだけで脳の中にイメージが表象される）オノマトペという独特な言葉に注目することによって、タイ語母語話者の音象徴感覚、「タイ語の音声記号と概念との対応パターン＝タイ語音スキーマ」を明らかにする。

寛（1993）によると、オノマトペの語彙化には下の4つの段階があるとされており、日本語の場合は、第二及び第三段階のオノマトペが多いようであるが、タイ語の場合、第二段階の慣用性の高いオノマトペは存在するものの日本語と比較すると数は少ない。それに比べて第三段階及び第四段階のオノマトペが多いと予想され、語彙化一動詞化したもの、名詞化したもの、形容詞化したもの等が数多く存在する。日本語のように、形態的な側面や音韻の側面から、オノマトペ独自の語彙層を形成しているわけではなく、明確にオノマトペであると認識できる言葉は比較的少ない。その一方で、完全に一般語化しているが、アンケートなどを取るとほとんどの人が“音が意味を表している”、“音と意味とが関係しているように感じる”、つまり音象徴性があると答える語が非常に多いのである。オノマトペの範疇化に関しては問題が残るが、それはタイ語の特徴のひとつであると言えるだろう。

今回は、オノマトペの中でも特に類像性、音象徴性の高い擬音語について調査を行った。調査は三回に分けて行い、第一回目の調査には様々な場面を現す絵、第二回目の調査

には映画の中のさまざまな場面の映像を用意し、それぞれの場面の音をどのように擬音語によって表すかをタイ語母語話者に考えてもらうというものであった。第三回目はインタビュー形式でさまざまな場面に使う擬音語とそれぞれの持つ細かいニュアンスの差異を答えてもらった。第一回から第三回を通じて、回答には臨時語の擬音語が多く、結果的により音象徴性の高いオノマトペを回収することができた。

得られた結果を分析することにより、「短母音と長母音」や「帯気音と不帯気音」、「二重頭子音」、「末尾子音の開音と閉音」、「単音節と複音節」、「頭子音・母音・末尾子音」等のタイ語の音要素の概念化パターンの一部を明らかにすることができた。例えば単音節の擬音語を、同じ頭子音と末尾子音の繰り返しで母音のみが違う二音節の擬音語（e.x. kɔp → kɔp kɛɛp）にすることによって、動作の対象となる物の量の多さや、その量の多さからくる音の大きさや複雑さを表すことができるなどといったことである。

また、擬音語に現れたひとつひとつの頭子音、母音、末尾子音、またはそれらの組み合わせパターンが表す音スキーマ、音象徴についても一覧にまとめることができた。例えば、末尾子音 *ɯp* の音は、1. 柔らかい物同士、または柔らかい物と硬い物がぶつかる音を表すのに用いることができる 2. 詰まって停止するイメージ、音の拡がりや遮断され内にこもるイメージを思い起こさせる 3. 唇に関連する音を表すことができる 4. 上と下で挟んで使う道具が出す音を表すことができる 等といった具合である。日本語と共通する点も見られたが、日本語にはないタイ語独自の音の特徴もあり、今後は他言語とも比較していきたいと考えている。

主要参考文献一覧

- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ『オノマトペ ―形態と意味』、くろしお出版、1999。
浅野鶴子・金田一春彦『擬音語・擬態語辞典』、角川書店、1978。
天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』、東京堂出版、1974。
笈寿雄／田守育啓『オノマトピア・擬音、擬態語の楽園』、勁草書房、1993。
風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学 第2版』、東京大学出版会、2004。
金素姫「日本語、韓国語に見られる擬音語・擬態語の対照研究」、『日本語・日本文化研修プログラム 研修レポート集』、第18期(2002年10月～2003年9月)。
小嶋孝三郎『現代文学とオノマトペ』、桜楓社、1972。
近藤利恵「オノマトペ〈音韻・形態・韻律〉」、名古屋経済大学、『名古屋経済大学経営学部開設記念論集』、2003。
柴谷方良、影山太郎、田守育啓、『言語の構造 ―理論と分析― 音声・音韻篇』、くろしお出版、1981。
荘司和子『ゼロから始めるタイ語 30日間会話入門』、語研、1997。

- 鈴木孝夫『私の言語学』、大修館書店、1987。
- 富田竹二郎『タイ日大辞典』、めこん、1997。
- 田守育啓『〈もっと知りたい！日本語〉オノマトペ・擬音・擬態語をたのしむ』、
岩波書店、2002。
- 田中晴美編『言語学入門』、大修館書店、1975。
- ノーム・チョムスキー (加藤泰彦、加藤ナツ子訳)『言語と認知 ―心的実在としての言語-』、
秀英書房、2004。
- パンパニー・スントーンムニー「日タイ両語における擬音語・擬態語について」、『日本語・
日本文化研修プログラム 研修レポート集』、第 18 期(2002 年 10 月～2003 年 9 月)。
- 町田健『ソシュールと言語学 ―コトバはなぜ通じるのか- 』、講談社現代新書、2004。
- 丸山圭三郎『ソシュールを読む』、岩波セミナーブックス、1983。
- 丸山圭三郎『ソシュール小事典』、大修館書店、1996。
- 宮本マラシー『サワッディー ―日常生活の中のタイ語会話』、国際語学者、1996。
- 吉村公宏『認知意味論の方法 ―経験と動機の言語学-』、人文書店、1995。
- 吉村公宏『はじめての認知言語学』、研究者、2004。
- Shoko Hamano, *The Sound-Symbolic System of Japanese*, 黒潮出版、1998。
- พ. นววรรณ, “การใช้ภาษา”, บริษัทการพิมพ์สตรีสาร จำกัด , 1977. ph.Navavan, “kaan chai
phasaa Thai”, borisatkaanphim satriisaan camkat,1977.
- พุทธชาติ ข.โปธิบาล, “เสียงและระบบเสียง : ภาษาไทย”, มหาวิทยาลัยสงขลานครินทร์ ปัตตานี , 1997.